

一

三

の中から二題を選択して解答しなさい。

選択しない問題の解答番号には、絶対にマークをしないでください。

一

次の文章は、『源氏物語』若紫巻の一節である。幼い紫の上(文中では「若君」など)は、母に先立たれ、最近祖母も亡くし、実父の兵部卿宮(文中では「宮」)に引き取られようとしている。それを知った光源氏は、強引に紫の上を自邸に迎え取ることにした。これを読み、後の設問に答えなさい。

門うち叩か^{かど}せたまへば、心も知らぬ者の開けたるに、御車をやをら引き入れさせて、大夫妻戸^{たいふ}を鳴らしてしはぶけば、少納言聞き知りて出で来たり。^{注1}「ここに、おはします」と言へば、「幼き人は御殿籠りてなむ。などか、いと夜深うは出でさせたまへる」と、もののたよりと思ひて言ふ。「宮へ渡らせたまふべかなるを、その前に聞こえおかむとてなむ」とのたまへば、^{注2}「何ごとにかはべらむ。いかにかはかしき御答へ聞こえさせたまはむ」とて、うち笑ひてゐたり。

君入りたまへば、いとかたはらいたく、「うちとけて、あやしきふる人どものはべるに」と聞こえさす。「まだおどろいたまはじな。いで御目さましきこえむ。かかる朝霧を知らでは寝るものか」とて入りたまへば、「や」とも聞こえず。^①

君は、何心もなく寝たまへるを、抱きおどろかしたまふに、おどろきて、宮の御迎へにおはしたると寝おびれて思したり。御髪搔きつくろひなどしたまひて、「いざたまへ。宮の御使にて参り来つるぞ」とのたまふに、あらざりけりとあきれて、おそろしと思ひたれば、「あな心憂。まろも同じ人ぞ」とて、かき抱きて出でたまへば、大夫、少納言など、「こはいかに」と聞こゆ。

「ここには、常にもえ参らぬがおほづかなければ、心やすき所にと聞こえしを、心憂く渡りたまふべかなれば、まして聞こえがたかべければ。人ひとり参られよかし」とのたまへば、心あわたたしくて、^③「今日はいと便なくなむはべるべき。宮の渡らせたまはんには、いかさまにか聞こえやらん。おのづから、ほど経てさべきにおはしまさば、ともかうもはべりなむを、いと思ひやりなきほどのことにはべれば、さぶらふ人々苦しうはべるべし」と聞こゆれば、^A「よし、後にも人は参りなむ」とて御車寄せさせたまへば、あさましう、いかさまにと思ひあへり。若君も、あやしと思して泣いたまふ。少納言、とどめきこえむ方なければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、みづからもよろしき衣着かへて乗りぬ。^{注3}

二条院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。少納言、^B「なほいと夢の心地しはべるを、いかにしはべるべきことにか」とやすらへば、^A「そは心ななり。御みづから渡したてまつりつれば、帰りなむとあ

らば送りせむかし」とのたまふに、笑ひて下りぬ。にはかに、あさましう、胸も静かならず。宮の思しのたまはむこと、いかになりはてたまふべき御ありさまにか。とてもかくても、頼もしき人々に後れたまへるがいみじさ、と思ふに、涙のとまらぬを、さすがにゆゆしければ、念じゐたり。

④ こなたは住みたまはぬ対なれば、御帳などもなかりけり。惟光召して、御帳、御屏風など、あたりあたりしたてさせたまふ。御几帳の帷子引き下ろし、御座などただひきつくろふばかりにてあれば、東の対に御宿直物召しに遣はして大殿籠りぬ。若君は、いとむくつけう、いかにすることならむとふるはれたまへど、さすがに声たててもえ泣きたまはず、「少納言がもとに寝む」とのたまふ声いと若し。⑤「今は、さは大殿籠るまじきぞよ」と教へきこえたまへば、いとわびしくて泣き臥したまへり。乳母はうちも臥されず、ものもおほえず起きゐたり。

注1 大夫：源氏の腹心の従者の惟光のこと。

注2 少納言：紫の上の乳母。

注3 二条院：源氏の自邸。

1 問一 傍線部①「え聞こえず」は、ことばを補って解釈するとどのようなになるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 少納言は、源氏をお止めすることばを発することができない。

② 少納言には、源氏がかかる声が聞こえない。

③ 源氏は、声もかけないでいきなり入っていらっしゃる。

④ 若君は、びっくりして声を発することができない。

⑤ 源氏には、若君の驚く声が聞こえない。

2

問二 傍線部②「あらざりけり」についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 若君は、迎えに来たのが使者ではなく本人であったので驚いた。
- ② 源氏は、自分が迎えに来たのを若君が喜ばないので、意外に思った。
- ③ 若君は、宮が迎えに来たものと思っていたが、違う人であったと気がついた。
- ④ 少納言は、源氏が宮の使いで来たとうそをついていたことがわかった。
- ⑤ 源氏は、宮の使いで来たと言われたので、不愉快に思った。

3

問三 若君を強引に連れて行く源氏の言い分はどのようなものか。その内容をまとめたものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 宮邸にはなかなか参上できないので、若君は安心な宮邸に移られたらよいと申し上げていたが、宮にはこのことを申し上げにくい。
- ② ここにはしばしば来れないので若君を自邸に引き取りたいと申し上げていたが、若君が宮邸に移ってしまうと、さらに会いにくくなる。
- ③ 私はとても心配なので、安全なところに移ってほしいと思っていたが、若君が移るのはいやだと言うのは理解できない。
- ④ 宮邸は常に参上できないところとはいえ、宮邸のほうが安心だとは申し上げていたが、やはり私は気が変わったのである。
- ⑤ ここにはなかなか来れないので、若君を自邸に引き取りたいと思っていたが、宮が先に引き取っていったのでどうすることもできない。

4

問四 傍線部③「今日はいと便なくなむはべるべき」とあるが、少納言がこのように言うのはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 今日すぐというのは、お仕えしている自分たちとしても気がかりなことになるから。
- ② 今日衣なども整わないので、源氏邸に移るに当たってはきちんと用意してから移りたいから。
- ③ 他所に移るには良き日を選んで行すべきだが、今日は吉日ではないから。
- ④ 宮が見えた時にきちんと話をして、源氏邸に移ることに了解を得てからにしてほしいと思うから。
- ⑤ 宮が来て若君がいないのをどのように思われるのかと思うと、自分たちとしても困るから。

5 問五 文中のA～Eの発話のうち、源氏の発話はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① A C

② B D

③ C E

④ C D E

⑤ A C E

6 問六 二重傍線部ア「やすらへ(やすらふ)」・イ「ゆゆしけれ(ゆゆし)」の意味は何か。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選

び、その番号をマークしなさい。

① ア||ためらう イ||不吉である

② ア||ぐずぐずする イ||行ってみたい

③ ア||様子を見る イ||すばらしい

④ ア||とどまっている イ||恐れ多い

⑤ ア||休息する イ||縁起が悪い

7 問七 傍線部④「頼もしき人々に後れたまへるがいみじさ」とはどのような意味か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番

号をマークしなさい。

① 頼りになる人たちに先立たれても幸運をつかむこともある。

② 頼りになる人たちの到着が遅れるとこのような予想外のことが起きる。

③ 頼りになる人たちに先立たれるかどうかは運次第である。

④ 頼りになる人たちより出発が遅くなったのは不幸なことだ。

⑤ 頼りになる人たちに先立たれたというのは不運なことだ。

8

問八 二重傍線部ウ「帷子」・エ「宿直物」の漢字の読みは何か。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- | | | |
|---|---------|-------------|
| ① | ウ おおい | エ しゆくちよくもの |
| ② | ウ きぬ | エ やどなおもの |
| ③ | ウ かたびら | エ とのいもの |
| ④ | ウ とばり | エ よいいもの |
| ⑤ | ウ うちき | エ やどいもの |

9

問九 傍線部⑤「いとむくつけう」とあるが、若君はなぜそのように感じたのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 源氏の二条院が思いのほか住みやすくなかったから。
- ② 夜もよく寝られず体調が良くなかったから。
- ③ いきなり連れてこられてゆくすえに不安を感じているから。
- ④ 源氏の強引なやりかたが不愉快であったから。
- ⑤ 知らない所に連れてこられて不思議に感じるから。

10

問十 『源氏物語』より後に成立した作品は次のうちどれか。適切なものを一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 落窪物語
- ② 竹取物語
- ③ 古今和歌集
- ④ 狭衣物語
- ⑤ 蜻蛉日記

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

昔、神代かみよよりこのかた、人の始まりて、いくほどとはおぼえず、大和国石上やまとのくにいそのかみのほとりに、あやしの翁おきなとうばとて侍りけるが、末の代までの契りとなして、年月久しくなりける。しかれども、一人の子といふものなかりければ、明け暮れ、ただこのことを歎なげき悲しみけり。また、瓜うりを作りて、朝夕世をわたりけるが、年重なるに従ひ、身の末も、はや山の端は近くなりければ、今は、思ふにかひあらず、先の世の報いこそ悲しけれと、常は、かなはぬことをぞ歎なげきける。

さるほどに、翁、作り置きたる瓜の畑に行きて、世にうつくしき瓜を一つ取りて、うばに見せ、「この瓜のうつくしきよ、あはれ、これほどいたいたけなる、幼いものを持ちたれば、いかばかりうれしかりなん」など戯たはぶれ、「これを取りて、おとしことせん、あまりにうつくしきに」と言ひければ、うば、塗桶ぬりをけの中へ入れて置きたり。その後、かの翁、「夢に見ること、天の御はからひにて、うつくしき手鞆まりを給はると見え、これを、なんちが子と頼めと、仰せありつる」と語りければ、うばも申しけるは、「われもちとまどろみたりつるに、よき草子箱さうしを見るに、わが子とて、世にうつくしき姫君のありつるに、取らすると見つるなり」と、たがひに夢語りして、「あまりに思ふことなれば、夢にさへ」などとて暮らしぬ。

翁、また瓜の畑に行きて、やはらかなる瓜一つ取りて、食はんとしける時、「さても、いつぞや取りて置きたりつる瓜、いかになりぬらん」とて、取り出しければ、みめかたちのうつくしう、光るほどの姫君なり。おほぢ、うば、ありがたきことに思ひて、申すやう、「さても、ありし夜の夢に、かやうのことのあらんずとて、かねてより、不審Aの知らせ給ひけるよ」と、なのめならず喜びてぞ、明かし暮らして、かしづき育てけり。

かくて、この姫君、月日重なるほどに、日に添へて、いたいに、みめうつくしきのみならず、たちゐるまひ、智慧、骨柄、いたいけになりて、人のやうにもなく、ありがたかりければ、よろづやさしきことをのみ教へける。手習ひ、絵かき、花結はなむすなんどせaせ給ひける。おほぢ、うば、うれしきことに思ひて、これにつけても、わが行方ゆくへいくほどならぬは、いかにもして、とくおとなしくなりて、人の前にも出でて、たちふるまふほどにもならばなんと思ひ、つぶやきあたり。

かくて、いくほどなく、年十四五にも見えければ、いとどみめかたちうつくしくて、野辺に咲き乱れたる女郎花イの、露おもたげなるこちして、眉ひたい、額、髪のかかり、雪の肌はだまでも、なべてならず、唐の楊貴妃やうきひ、漢の李夫人りふじんも、かほどにはあらずとおぼえて、さながら天人やうがうの影向もかくやと見えたり。さるほどに、世の隠れなかりければ、国の守護代にて、威勢並ぶ人なかりければ、しかるべき人を尋ね給へども、心になふ人なくして、明かし暮らし給ふところに、^③このことをきこしめして、かの翁がり、しのびしのびに文遣はしける。^B「ゆめゆめさやうのこと侍らず」と、たびたびいなみ申しけれども、隠れなきことなれば、さすがに数積りければ、この文取り入れにけり。さても、かやうに文を取り入れて、「翁とうば、はからひ申す

べき。かやうのことは、行く末のよし悪しにて、知らねども、便りはうれしきことなり。国守殿より、かりそめながら承らば、ゆかしき御ことなり」など言ひあはせたる。

折節、天照^{あま}る御神天降りける昔より、万^{よろ}のことに障り、煩ひなす、あまのさぐめといふくせものあり、このところにうれしきことかな、この姫君を、何ともしてすかし出し、われら入り代りて迎へられ、いつきかしづかればやと思ひて、急ぎ帰りけり。この姫君、御嫁入りのこと定まり、約束の頃近くなりければ、うばも、しづ心なくて、ありきの具足など尋ねばやと思ひけるところに、国司より、雑色^{ざふしき}に文を持たせて、いろいろの御装束思ふほど入れたる長持^{ながもち}、あまた持ちてぞ送られける。あまのさぐめ、うれしきことに思ひて、いとどこの姫君めをたばかり出すべきことをはからひ案じ、ためらひ歩きけり。さてまた、このうば、あからさまに申し添^ウへありきが、姫君に申しおきけるやう、「あなかしこ、われらが帰り参らんほどは、人のもの申さんと申すとも、この遣戸^エをあけさせ給ふべからず」と言ひおきて、出でにけり。

(お伽草子『瓜姫物語』による)

11 問一 傍線部ア「いたいけなる」・ウ「あからさまに」の意味は何か。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマ―

クしなさい。

- | | | |
|---|----------|----------|
| ① | ア〓かわいらしく | ウ〓ちよつと |
| ② | ア〓繊細で | ウ〓大げさに |
| ③ | ア〓上品で | ウ〓しばらくして |
| ④ | ア〓新鮮で | ウ〓長々と |
| ⑤ | ア〓素晴らしく | ウ〓丁寧に |

12

問二 傍線部①「あまりに思ふこと」とあるが、どのようなことを意味しているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 姫君を養女として迎え入れること
- ② 夫婦で末永く幸せに過ごすこと
- ③ 瓜をたくさん生産すること
- ④ わが子を授かること
- ⑤ 高価なものを手に入れること

13

問三 傍線部A「知らせ給ひける」・B「文遣はしける」の動作の主体はそれぞれ誰か。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① A 翁とうば B 翁
- ② A 翁 B 国の守護代
- ③ A うば B 翁
- ④ A 姫君 B 翁
- ⑤ A 天 B 国の守護代

14

問四 傍線部a「させ」・b「させ」の文法的説明の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① a 使役の助動詞「さす」の未然形 b 使役の助動詞「さす」の未然形
- ② a 使役の助動詞「さす」の連用形 b 尊敬の助動詞「さす」の連用形
- ③ a 尊敬の助動詞「さす」の未然形 b 使役の助動詞「さす」の未然形
- ④ a 尊敬の助動詞「さす」の連用形 b 使役の助動詞「さす」の連用形
- ⑤ a 尊敬の助動詞「さす」の連用形 b 尊敬の助動詞「さす」の連用形

15

問五 傍線部②「わが行方いくほどならぬは、いかにもして、とくおとなしくなりて」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ

選び、その番号をマークしなさい。

- ① 私は大して生きられないから、何とか早く一人前になって
- ② 私はどこへ行くかわからないから、何とかそのまま大人っぽくなって
- ③ 私はいつまで生きられるかわからないから、どうにかしてやがて落ち着いて
- ④ 私はどうなるかわからないから、どうにかしてまずは穏やかに見守って
- ⑤ 私はもうすぐ死んでしまうから、どうにかしてすぐに安心させて

16

問六 傍線部イ「女郎花」・エ「遣戸」の漢字の読みは何か。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① イ||さざんか エ||つきど
- ② イ||おみなえし エ||やりど
- ③ イ||なでしこ エ||つまど
- ④ イ||こすもす エ||ふしど
- ⑤ イ||ふじばかま エ||けんど

17

問七 傍線部③「このこと」とあるが、どのようなことを意味しているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 姫君が出家しようとしていること
- ② 守護代が結婚相手を探していること
- ③ 姫君が守護代に会うことを望んでいること
- ④ 守護代が活躍していること
- ⑤ 姫君が大変美しいこと

18

問八

傍線部④「ゆめゆめさやうのこと侍らず」と、たびたびいなみ申しけれども」とあるが、その解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 「決してそのようなことはありません」と、何度もお断り申し上げたけれども
- ② 「たぶんそのようなことはないでしょう」と、何度も喜んで申し上げたけれども
- ③ 「そのようなことは思ってもみなかったことです」と、何度もお返事申し上げたけれども
- ④ 「きっとそのようなことはないでしょう」と、何度もお悔やみ申し上げたけれども
- ⑤ 「そのようなことは願ってもみなかったことです」と、何度も涙ぐんで申し上げたけれども

19

問九

傍線部⑤「このところにうれしきことかな」とあるが、なぜ「うれしきこと」なのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① あまのさぐめは、何とか姫君を盗み出し、大切にお育て申し上げれば、守護代に認めてもらえると考えたから。
- ② 守護代は、あらゆることに苦しみをもたらしているあまのさぐめをおびき出すのに、姫君をうまく利用できると思ったから。
- ③ あまのさぐめが、姫君を何とかだまして誘い出し、自分が入れ替わって奥方になれば、大事に世話してもらえると考えたから。
- ④ あまのさぐめは、翁とうばの状況を知り、姫君を何とか探し出すことができれば、大切にお仕え申し上げることができると思ったから。
- ⑤ 守護代は、姫君を手に入れるのに、あまのさぐめを使って姫君を盗み出すことができるのではないかと考えたから。

20

問十

本文中で、美人の代表として名前が挙げられている楊貴妃と唐の玄宗皇帝の恋を扱った作品として『長恨歌』があり、『源氏物語』の最初の巻は、『長恨歌』の強い影響を受けていることが指摘されている。その巻名として適切なものを一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 帚木はきぎ
- ② 若紫
- ③ 桐壺
- ④ 明石
- ⑤ 若菜

次のⅠの文とⅡの詩を読み、後の設問に答えなさい。(なお、設問との関係などにより、訓点を省略した箇所がある。また、設問中に問題文を引用した箇所の訓点もすべて省いてある。)

Ⅰ

李涉、洛陽人、渤之仲兄也。自号清溪子。①早歲客梁園、数逢乱兵、避地南来、②樂佳山水、卜隱匡廬香炉峰下石洞間。嘗養一白鹿、甚馴狎、因名所居曰白鹿洞、与弟渤、崔膺、昆季茅舍相接。後徙居終南、偶從陳許辟命、從事行軍。未幾、以罪謫夷陵、宰十年、躋蹬峽中、病瘡成痼、自傷羈逐、頭顱又復如許。後遇赦得還、賦詩云、「荷蓑不是人間事、③歸去滄江有釣舟。」遂放船重来、訪吳・楚旧遊、登天台、石橋、望海。得風水之便、掛席浮瀟・湘・岳陽、逢張祐、話故、因盤桓、④歸洛下、營草堂、隱少室。身自耕耘、妾能織紉、稚子供漁樵、拓落生計、伶俜酒鄉、罕交人事。大和中、宰相累薦、徵起為太学博士、卒致仕。妻亦入道。涉工為詩、詞意卓犖、不群世俗。長篇叙事、如行云流水、無可牽制、才名一時欽動。初、嘗過九江、至皖口、遇夜客方踰伏、問、「何人。」曰、「李山人。」豪首曰、「若是、勿用剽奪。」久聞詩名、願題一篇足矣。」涉欣然書曰、「暮雨瀟瀟江上村、綠林豪客夜知聞。他時不用藏名姓、世上如今半是君。」大喜、因以牛酒厚遺、再拜送之。詩集一卷、今伝。

(『唐才子伝』による)

II

題^ス鶴林寺^ニ

李涉

終日昏昏^{タリ} 醉夢間^⑤

忽聞^チ春尽^{キテ} 強登^{クルラ} 一^⑥ 強登^{ヒテ} 一^ル □^ニ

⑦ 因過竹院逢僧話

又得浮生半日閑

(「三體詩」による)

(Iの注)

○李涉〓中唐の詩人。生没年未詳。絶句に優れた作品を多く残している。

○梁園〓前漢時代に梁の孝王が造営した庭園。今の河南省

商丘市付近にあった。唐代にはすでに荒廃しており、その場所も汴州(河南省開封市)にあったと考えられるようになっていた。ここ

も梁園そのものを指すのではなく、汴州の地をいったものである。

○卜隱〓占って隱棲の地を定める。

○匡廬〓廬山の別名。江

西省九江市の南にあり、殷・周時代に仙人の匡俗が隠れ住んだことからこのようにいう。

○香炉峰〓廬山の北にある峰。香炉の形に

似ていることから名づけられた。

○馴狎〓なれる。

○崔膺昆季〓崔膺兄弟。「崔膺」は、中唐の詩人。生没年未詳。「昆季」は、「昆

が長兄、「季」が末弟のこと、そこから兄弟をいう。

○終南〓終南山。陝西省西安市の南を東西に走る山脈の高峰。

○陳許辟命〓

陳許節度使によるお召し。「陳許」は、許州(河南省許昌市)と陳州(河南省周口市淮陽区)の軍事・民政を掌る節度使のこと。陳許節度使

は、貞元三年(七八七)に置かれた。

○行軍〓行軍司馬の略称。節度使の幕僚で、軍政を補佐する重要な役職。

○謫夷陵宰〓夷陵県

の役人に左遷される。「夷陵」は、今の湖北省宜昌市。「宰」は、ここでは役人というほどの意。

○躑躅〓よろめく。

○病瘡成痼〓おこりを患ってそれが持病となる。「瘡」は、おこり。今のマラリアのことで、一定の間隔をおいて発熱する。「痼」は、長いあいだ治癒し

ない病氣。

○羈逐〓追放されて旅すること。

○頭顱〓あたま。

○如許〓このようだ。「許」は、「此」に同じく、「これ」の意。ここ

では、頭髮が白くなったことをいうか。

○荷蓑〓ハスの葉で編んだ蓑。仙人・隱者の身に着けるもの。

○呉・楚〓春秋時代に呉と

楚の二国があった地方。長江の中流から下流にかけての一带をいう。

○天台石橋〓天台山中の石の橋梁。「天台」は天台山で、今の浙

江省台州市の北にある名山。「石橋」は「石梁」ともいい、山中に懸かるアーチ状の石の橋をいう。○掛席〓むしろをかける。帆をあげ
る意。「席」は「蓆」に同じで、むしろのこと。○瀟・湘・岳陽〓「瀟・湘」はともに川の名で、瀟水と湘水。湘水は広西壮族自治区北部

に発し、湖南省永州市付近で瀟水と合して北流して洞庭湖に注ぐ。「岳陽」は、今の湖南省岳陽市。洞庭湖の北端に位置する。○張祐

〓中唐の詩人。七九二〜八五二？山水を愛し、名刹を歴訪して詩を作った。○話故〓昔のことを話す。○盤桓〓ぐずぐずして進

まないさま。○少室〓少室山。五岳の一つである嵩山の西の高峰。○妾〓つま。○織紉〓機織りする。「紉」は、機糸のこと。

○漁樵〓魚を取り木を切る。○拓落〓落ちぶれること。○伶俜〓さまようさま。○大和中〓大和年間。八二七〜八三五。「大和」

は、文宗の時代の年号。○太学博士〓中央に設けられた教育機関の教官。正六品上。「太学」は、長安と洛陽にあった教育機関で、入

学対象は五品以上の官僚の子孫と郡県公の子孫であった。○卓犖〓非常に優れていること。○欽動〓大勢のものが敬慕すること。

○九江〓今の江西省九江市。○皖口〓皖水が長江に注ぐところ。今の安徽省安慶市の西のあたり。○夜客〓盗人。盗賊。後出の

「豪客」も同じ。○跼伏〓潜む。「跼」は、かがむ。身をかためて待ち伏せする。○豪首〓盗賊の首領。○剽奪〓脅し取る。○欣

然〓喜ぶさま。○瀟瀟〓雨の寂しく降るさま。○他時〓将来。

（Ⅱの注）

○鶴林寺〓今の江蘇省鎮江市の南郊の黄鶴山にあった寺の名。もと竹林寺といった。○昏昏〓うつらうつらしているさま。○竹院

〓竹に囲まれた寺院。○浮生〓はかない人生。

問一

傍線部①「客梁園」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 梁園の主である孝王に賓客として招かれた。
- ② 梁園の地に旅人として滞在していた。
- ③ 梁園の地と故郷とを往き来していた。
- ④ 梁園の地で客人を待っていた。
- ⑤ 梁園の主である孝王とともに客人をもてなした。

22

問二 傍線部②「因名所居曰白鹿洞」の書き下し文として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 名所に因^{ちな}みて居を白鹿洞と曰ひ
- ② 名あるに因りて白鹿洞と曰ふ所に居し
- ③ 因りて居する所に名づけて白鹿洞と曰ひ
- ④ 所の名に因みて居を曰ひて白鹿洞とし
- ⑤ 因りて名所の居もて白鹿洞と曰ひ

23

問三 波線部①「幾」と②「為」の読み方(送り仮名を含む)として最も適切な組み合わせを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① ① a ちかから ② b ためにし
- ② ① a はなはだしから ② b なし
- ③ ① a あやふから ② b せられ
- ④ ① a いくばくなら ② b つくり
- ⑤ ① a ほとんどなら ② b をさめ

24

問四 傍線部③「不是人間事」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 俗世間の事物ではない。
- ② 宮廷社会に関わる事柄ではない。
- ③ 人間に必要なものではない。
- ④ 民間人の行う生業ではない。
- ⑤ 人として正しい行為ではない。

25

問五 二重傍線部①「問」②「曰」③「大喜」の動作の主体はそれぞれ誰であると考えられるか。本文中の語を用いて示すならば、最も適切な組み合わせ

せを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|
| ① | イ | 豪首 | ロ | 夜客 | ハ | 李涉 |
| ② | イ | 李涉 | ロ | 李涉 | ハ | 夜客 |
| ③ | イ | 夜客 | ロ | 豪首 | ハ | 李涉 |
| ④ | イ | 李涉 | ロ | 豪首 | ハ | 夜客 |
| ⑤ | イ | 夜客 | ロ | 李涉 | ハ | 豪首 |

26

問六 傍線部④「勿用剽奪」の書き下し文として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 用て剽奪する勿かれ
- ② 剽奪を用ゐず
- ③ 剽奪を用てする勿からんや
- ④ 剽奪を用ゐる勿からん
- ⑤ 用ゐる勿くんば剽奪せん

27

問七 傍線部⑤「醉夢間」とはどのような状況をいつたものか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 俗事にあくせくして、むなしく人生を過ごしている。
- ② 孤独の中で酒に逃避して享樂的な日々を過ごしている。
- ③ 官職に就けず、世俗的な榮達に見放された不遇の日々に憤りを抱いて過ごしている。
- ④ 貧窮の中で、ただその日その日を何とか生き延びるために妻子とも離れて孤独な暮らしをしている。
- ⑤ 世俗に関わることなく、悠々自適の生活をしている。

28

問八 傍線部⑥「強」には作者のどのような思いが込められていると考えられるか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 官職に恵まれない境遇の中で何とか生きる目的を見つけようとする気持ち。
- ② 春が終わろうとするのを惜しみ、それを楽しみつくそうとする決意。
- ③ 日常に埋没した生活から思い切って抜け出そうとする気持ち。
- ④ 春が終わって新しい季節を迎えることへの抑えがたい喜び。
- ⑤ 慣れ親しんだ日々の生活を変えることへの不安感。

29

問九 □に入れるのに最も適切な字を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 楼
- ② 山
- ③ 台
- ④ 丘
- ⑤ 塔

30

問十 傍線部⑦「因過竹院逢僧話」を「竹院に過り僧に逢ひて語るに因りて」と訓読するための返り点の付け方として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 因_下過_二竹院_一逢_中僧話_上
- ② 因_四過_二竹院_一逢_レ僧話_三
- ③ 因_レ過_三竹院_二逢_二僧話_一
- ④ 因_下過_二竹院_一逢_中僧話_上
- ⑤ 因_下過_二竹院_一逢_レ僧話_上

(以上で問題は終わります。解答番号 31 以降は使用しません。)